

A-7

バスク語の動詞 *ari* 「する」と共起する副詞は補語か修飾語か

石塚 政行

要旨 バスク語の自動詞 *ari* 「する」はほとんどの場合副詞的要素を伴うが、この副詞的要素が *ari* の補語であるのか修飾語であるのかは自明ではない。本発表ではこれらのある種のコントロール構文によって分類し、認知文法の道具立てを用いて、この構文に単独で現れるものは *ari* の補語であり、他は修飾語であること、*ari* の補語である副詞的要素（副詞類 A）は述語的性質を持つことを主張する。それによって、従来は修飾語と述語からなると分析されてきた副詞類 A と動詞からなる文には、述語的要素が複数あると提案する。

1. はじめに

複数の述語的要素が単一の文に含まれる構造を扱う節連結の理論は、諸言語の記述と説明に必要なだけでなく、移動類型論を始めとする事象統合の類型論にも欠かすことのできないものである。節連結論において主として問題となるのは、どのような単位がどのような関係で結びついているかということであり、特に複数の述語が単一の節をなすか・単一の事象を表現するかということが注目されてきた。それに対して、そもそも文中のどれが述語的要素であるのかということが争点となることは比較的少ないように思われる。

本発表は、バスク語のある種の副詞類を含む構造を節連結の観点から論じる準備として、その副詞類が述語的要素になりうると示すことを目的とする。そのために、バスク語の動詞 *ari* 「する」に着目し、これとともに用いられる副詞類を、アスペクト動詞および知覚動詞を用いて分類する。この分類に基づき、認知文法の枠組みを用いて、これらの副詞類には *ari* の補語となるものと修飾語となるものがあると論じ、前者が述語的要素であることを示す。

バスク語はスペインおよびフランスにまたがるバスク地方で話される系統不明の能格言語である。本発表はフランス側西部に分布するラブール＝低ナバラ方言のデータに基づき¹、例文は正書法に基づいて表記する。バスク語は形態的には能格言語だが、統語的には対格性を示す。本発表では自動詞の絶対格項と他動詞の能格項を主語、他動詞の絶対格項を目的語と呼ぶ。基本語順は SOV とされるが、情報構造も語順を決定する主要な要因である。述語動詞の直前が焦点、その前が主題の位置である。

バスク語の動詞の定形（定動詞）は法・時制・主要文法項（絶対格・能格・与格の項）と聞き手の人称・数などに応じて活用する。ほとんどの動詞は定形を持たず分詞のみを持ち、分詞と助動詞が組み合わさって初めて定形節の述語となる。自動詞主語は原則として絶対格項だが、一部の自動詞主語は能格項となる。本発表では前者のような自動詞を一類自動詞、後者のタイプを二類自動詞と呼ぶ。一類自動詞の助動詞は存在動詞 *izan*、二類自動詞と他動詞の助動詞は所有動詞 **edun* である。自動詞と他動詞どちらにも顕在的主語名詞句を持たない非人称動詞がある。

2. 動詞 *ari* の概要と 2 種類の副詞

動詞 *ari* 「する」は一類自動詞で、主語は絶対格項であり、存在動詞 *izan* を助動詞とする。原形 *ar*、不定形

¹ 1937 年生まれ Jaxu 出身の小説家 Jean Etxepare Landerretxe による小説と、1977 年生まれ Gamarthe 出身の話者からの聞き取り調査による。

ari², 動名詞 artze, 完了分詞 arizan, 不完了分詞 artzen, 未来分詞 ariko と語形変化する。ari は通常, 何をするか, どのようにするかを表す副詞類 (副詞その他の動詞修飾語句) とともに用いられる。代表例として, lasterka 「走って」と fite 「急いで」を (1) に挙げる。

- (1) a. *laster-ka* *ar-i*
 running-ADV LZ do-INF
 「走る」
- b. *fite* *ar-i*
 quickly do-INF
 「急いでやる」

接尾辞-ka によって派生される副詞は, ari と共起する主要な副詞類のひとつであるが³ (de Rijk 2008: 386), Hualde (2003a, 2003b) のように fite などの様態副詞と同列に扱う記述もある。事実, (2) のような例では, どちらの副詞も動詞 joan 「行く」の様態を修飾しているように見える。

- (2) a. {*oin-ez/laster-ka*} *joan*
 {foot-INS/running-ADV LZ} go.PFV
 「歩いて行く・走って行く」
- b. {*emeki/fite*} *joan*
 {slowly/quickly} go.PFV
 「ゆっくり行く・急いで行く」

いっぽう, de Rijk (2008: 912ff.) は-ka 派生副詞をその他の様態副詞と区別して記述している。de Rijk によれば, 接尾辞-ka は他動詞 egin 「する」の目的語となる, 動作を表す名詞を語基とし, その動作が進行あるいは反復している状態を表す (ibid.)。本発表では, de Rijk のこの考えを発展させて, -ka 派生副詞を始めとするある種の副詞類は, fite などの様態副詞と異なり, 非完結的・非時間的に捉えられた進行中・反復中の動作を表すと提案する。

3. -ka 派生副詞はアスペクト動詞などの補語になる

副詞 lasterka 「走って」と fite 「急いで」の違いは, hasi 「～し始める」, ikusi 「～するのを見る」, jakin 「～の仕方を知っている, ～できる」といった動詞⁴を用いることで明らかになる。以下, これらの動詞を「基準動詞」と呼び, 副詞類分類の基準として用いる。基準動詞は裸位置格 (bare locative: BLOC) -n の動名詞句を補語とする。例 (3) は lasterka ari 「走る」, fite ari 「急いでやる」という句を基準動詞の補語にしたものである。

- (3) a. *laster-ka* *ar-tze-n* {*has-i/ikus-i/jakin*}
 running-ADV LZ do-GER-BLOC {start-PFV/see-PFV/know.how.to.PFV}
 「走り始める/走っているのを見る/走れる」
- b. *fite* *ar-tze-n* {*has-i/ikus-i/jakin*}
 quickly do-GER-BLOC {start-PFV/see-PFV/know.how.to.PFV}
 「急いでやり始める/急いでやるのを見る/急いでやることができる」

lasterka を始めとする-ka 派生副詞は, (4) のように ari なしで基準動詞の補語になることができる⁵。

² 語形 ari は, 助動詞と結びついて単純変化動詞の単純現在・単純過去に相当する意味を表し, nahi 「～したい」の補語となり, 未来分詞の語基となる。本発表ではこれらの機能を持つ語形を不定形と呼ぶ。

³ 動詞 ari と共起する-ka 派生副詞としては, lasterka の他に atxemanka 「追いかけてこをする」, igerika 「泳ぐ」, ihausika 「吠える」, inguruka 「歩き回る」, intzirika 「泣き叫ぶ」, jauzteka 「スキップする」, joka 「殴る・蹴る」, keinuka 「身振りをする」, oihuka 「叫ぶ」, pindarka 「輝く」, xipaka 「小魚を探す」, zanpaka 「殴る・蹴る」などがある。

⁴ 一般に, 動詞 ari と共起する副詞類は, 自動詞 hasi 「始める」の補語となる副詞類と一致する (de Rijk 2008: 390)。また, これ以外にも, 同種の副詞類を補語とするアスペクト動詞・知覚動詞・認識動詞が存在し, その共通点は裸位置格の動名詞句を補語とするということである (cf. 石塚 2021)。こうした動詞には, ここで挙げたもの他に, segitu 「～し続ける」, entzun 「～するのを聞く」, senditu 「～するのを感じる」, ahantzi 「～の仕方を忘れる, ～できなくなる」, ikasi 「～の仕方を覚える, ～できるようになる」が含まれる。

⁵ なお, (4a) は「走りながら (何かを) 始めた」, (4b) は「走りながら Erramun を見た」の解釈も可能である。(4c) は jakin 「～の仕方を知っている」が状態アスペクトのため, 「走りながら知っている」の解釈は容認されない。

- b. *nigarr-ez* {*has-i/ikus-i/jakin*}
 tear-INS {start-PFV/see-PFV/know.how.to.PFV}

「泣き始める/泣いているのを見る/泣くことができる」

その他、接尾辞-ketaによって派生された副詞⁸ (10a), 《dena+名詞》構文 (10b), 《動詞原形+eta+動詞原形》構文 (10c), 裸位置格動名詞句⁹ (10d) が ari と共起し, 基準動詞の補語となる。

- (10) a. *sugai-keta* {*ar-i/has-i/ikus-i/jakin*}
 firewood-ADV LZ {do-INF/start-PFV/see-PFV/know.how.to.PFV}
 「薪取りをする/薪取りをし始める/薪取りをするのを見る/薪取りができる」
- b. *dena gogoeta* {*ar-i/has-i/ikus-i*}¹⁰
 whole thought {do-INF/start-PFV/see-PFV}
 「考え込む/考え込み始める/考え込んでいるのを見る」
- c. *labe zilo-an sar eta sar* {*ar-i/has-i/ikus-i*}
 stove hol-LOC enter and enter {do-INF/start-PFV/see-PFV}
 「かまどの穴を出たり入ったり{する/し始める/するのを見る}」
- d. *bixotxa gai-en apaila-tze-n* {*ar-i/has-i/ikus-i/jakin*}
 cake dough-PL.GEN prepare-GER-BLOC {do-INF/start-PFV/see-PFV/know.how.to.PFV}
 「ケーキ生地の準備を{している/し始める/するのを見る/することができる}」

これに対して, 方格名詞句¹¹ (11a) や, やり方の良否を表す *untsa* 「上手く」や *gaizki* 「下手に」などの副詞 (11b) は, ari と共起するが基準動詞の補語にはならない。

- (11) a. *etxe-rat* {*ar-i/*has-i/*ikus-i/*jakin*}
 house-ALL {do-INF/start-PFV/see-PFV/know.how.to.PFV}
 「家へ行く/*家へ出発する/*家へ行くのを見る/*家への行き方を知っている」
- b. *untsa* {*ar-i/*ikus-i/*jakin*}¹²
 well {do-INF/see-PFV/know.how.to.PFV}
 「うまくやる/*うまくやるのを見る/*うまくやることができる」

オノマトペは一般に ari と共起可能であるが, 基準動詞の補語になるものとならないものがある (12)。

- (12) a. *tanpa tanpa* {*ar-i/has-i/send-i-tu*}
 throbbing {do-INF/start-PFV/feel-PFV}
 「ドキドキする/ドキドキし始める/ドキドキするのを感じる」
- b. *briu brau*¹³ {*ar-i/*has-i/*ikus-i*}
 hurriedly {do-INF/start-PFV/see-PFV}
 「バタバタする/*バタバタし始める/*バタバタするのを見る」

まとめると, ari と共起する副詞類のうち, -ka 派生副詞, 位置格名詞句, 具格名詞句, -keta 派生副詞, 《dena

⁸ 接尾辞-keta は物を表す名詞について, 「その物を探して」という意味を表す副詞を作る (de Rijk 2008: 567)。

⁹ 《裸位置格動名詞句+ari》構文は動名詞が表す動作の進行を表す。Lafitte (1995: 347), Etxepare (2003), Ortize de Urbina (2003), de Rijk (2008: 386f.)などを参照。

¹⁰ 《dena+名詞》構文および《動詞原形+eta+動詞原形》構文については, 何らかの理由で *jakin* の補語とならないようである。

¹¹ 1977年生まれのコンサルタントの判断では, 《方格名詞句+ari》は自分より上の世代の言い方であり, 自分は同じ意味で《方格名詞句+abian izan》を用いるという。

¹² *untsa hasi* は何らかの理由で, 例外的に「上手くやり始める」の解釈が可能である。*untsa ikusi* は「よく見る」, *untsa jakin* は「よく知っている」の解釈なら容認される。

¹³ *briu brau* は, 行為者が慌てており, しばしばやり方が悪い加減であることを表す。

+名詞》構文，《動詞原形+eta+動詞原形》構文，裸位置格動名詞句は一般に基準動詞の補語となり，方格名詞句，やり方の良否を表す副詞は基準動詞の補語とならない。オノマトペには基準動詞の補語となるものとならないものがある。以下，これらの副詞類のうち基準動詞の補語となるものを「副詞類 A」，ならないものを「副詞類 B」と呼ぶ。

4. 副詞類 A は ari の補語である

この節では，認知文法の道具立てを用いて，副詞類 A は ari の補語であり，副詞類 B は修飾語であると論じる。副詞類 A および B の意味，基準動詞 ikusi および jakin の意味，そして動詞 ari の意味をそれぞれ概略的に提案し，それらがどのように意味的に統合されるかを説明する。

認知文法では，言語表現の喚起する意味のうち特に注意の焦点が向けられる部分をプロファイルと言い，何がプロファイルされているかが複合的な表現を作る上で重要であると考えられる。プロファイルは，モノ (thing) と関係 (relationship) に大別される (定義は Langacker 2008: Ch. 4 を参照)。関係は事象 (process) と事象でない関係に分けられる。事象は，時間の経過に伴って展開するものとして捉えられた関係であり，各時点で成立している個々の関係から構成される複合的な (complex) 関係である。事象でない関係は，時間の経過がプロファイルされていないという意味で，非時間的 (atemporal) 関係と言うこともある。非時間的關係には，英語の前置詞 in が表す位置関係のように，一時点で完全に把握可能な関係，すなわち単純な (simplex) 関係と，前置詞 to が表す移動 (位置関係の変化) のように，複合的な関係がある。後者の場合，連続写真のように，複合的關係全体が一度に捉えられているものとする。

4.1. 副詞類 A および B の意味

本発表は以下のようにバスク語の副詞類 A と B のプロファイルの特徴づける。両者はともに非時間的關係をプロファイルする。前者は，英語の進行形構文における現在分詞と同じく，非時間的かつ非完結的に捉えられた複合的關係をプロファイルする。図 1 は英語の進行形構文における現在分詞の意味を概略的に表したものである (Langacker 2008: 121)。円はモノを，

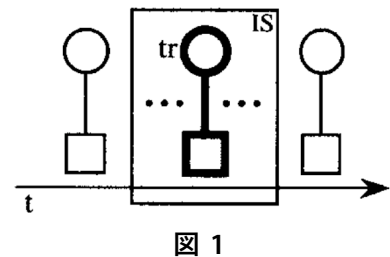


図 1

四角はモノまたは関係を表す。円と四角を結ぶ線は両者の間に成立している何らかの関係を，矢印 t は概念化の対象となる時間を表す。太線部分がプロファイルである。現在分詞や副詞類 A は，関係の時間的な変化によって特徴づけられる複合的な関係のうち，四角 IS で囲まれた部分をプロファイルする。IS は immediate scope の略であり，意味のベースのうち特に注意が向けられている範囲である。事象全体の開始・終局部分を除いた中間部分だけがプロファイルされている (=非完結的に捉えられている) ということである。また，この複合的關係は全体が一度に捉えられており，時間の経過はプロファイルされていない (=非時間的に捉えられている)。このことは，矢印 t が太線になっていないことが表している。

それに対して，副詞類 B は，事象を TR とする非時間的關係をプロファイルする。図 2 は，英語の move fast の意味構造を示したものである (Langacker 2009: 22)。図右下の四角に fast の意味が表示されている。TR (trajector, プロ

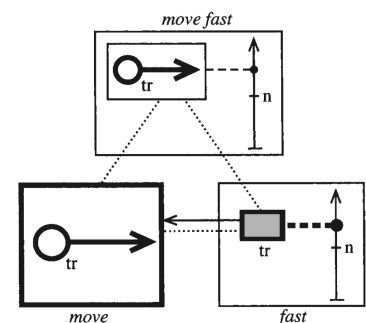


図 2

ファイルされている関係中で注意の中心となる部分) である四角はスキーマ的な事象を表し、それが右側の上向矢印が表す速度スケール上に位置づけられている。スケール上の n は標準値を表す。fast のプロファイルは、TR である事象とこのスケールとの関係であり、太点線によって表されている。

4.2. 基準動詞 ikusi および jakin の意味

副詞類 A と用いられる基準動詞 ikusi 「～するのを見る」や jakin 「～の仕方を知っている」は、図 3 のような意味を表す。図 3a は ikusi の意味を示している。破線矢印は、TR が LM (landmark, TR に次ぐ注意の焦点となる部分) であるモノおよびその動作を視覚的に認識しているという事象を表す。太線四角内が LM の動作を表し、点線はその動作の参与者であるモノが LM と同一であることを表す。この動作は非時間的に捉えられている。いっぽう図 3b は jakin の意味を示している。こちらでは、LM は何らかの非時間的に捉えられた動作であり、太線四角が囲んでいる円と実線矢印がそれを表している。TR と LM を結ぶ破線矢印は、TR が LM の仕方を知っているという事象を表す。両者の共通点は、非時間的に捉えられた動作が含まれる事象をプロファイルしているということである。副詞類 A はこの動作を精緻化できる (=副詞類 A はこのスキーマ的な動作の事例である) ため、単独で基準動詞の補語となることが可能である。いっぽう、副詞類 B は何らかの事象によって TR が精緻化される必要がある。基準動詞のプロファイルに含まれる動作は非時間的に捉えられているため、それ自体はこの TR を精緻化できない。結果として、基準動詞のプロファイルする事象そのものによって副詞類 B の TR は精緻化される (=副詞類 B が基準動詞自体を修飾する) ことになる。

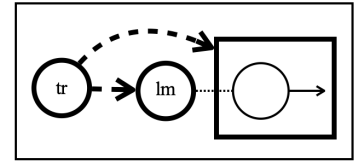


図 3a

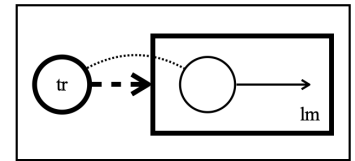


図 3b

TR と LM を結ぶ破線矢印は、TR が LM の仕方を知っているという事象を表す。両者の共通点は、非時間的に捉えられた動作が含まれる事象をプロファイルしているということである。副詞類 A はこの動作を精緻化できる (=副詞類 A はこのスキーマ的な動作の事例である) ため、単独で基準動詞の補語となることが可能である。いっぽう、副詞類 B は何らかの事象によって TR が精緻化される必要がある。基準動詞のプロファイルに含まれる動作は非時間的に捉えられているため、それ自体はこの TR を精緻化できない。結果として、基準動詞のプロファイルする事象そのものによって副詞類 B の TR は精緻化される (=副詞類 B が基準動詞自体を修飾する) ことになる。

4.3. 動詞 ari の意味

動詞 ari は、英語の進行形構文における be のように、非完結的に捉えられたスキーマ的な事象をプロファイルする。非時間的な関係をプロファイルする現在分詞が、スキーマ的な事象をプロファイルする be と組み合わせることで、全体として具体的な事象がプロファイルされるように (Langacker 2008: 125), ari は副詞類 A のプロファイルる事象化する役割を持つ。

図 4 は ari と lasterka 「走って」(副詞類 A) の意味の統合関係を表している。ari は lasterka 同様非完結的に捉えられた関係をプロファイルしているが、事象として捉えられていること (矢印 t の一部を太線にして表示)、表している

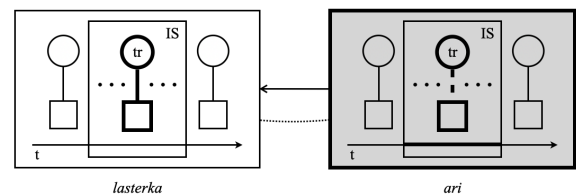


図 4

関係がスキーマ的なこと (プロファイルされている関係を破線で表示) が異なる。lasterka のプロファイルする「走る」という具体的な関係が、ari のプロファイルするスキーマ的な関係を精緻化することで両者の意味は統合されている。ari の意味構造の網掛け部分から lasterka の意味構造に延びる矢印は前者が後者に精緻化されることを、両者の間の点線は両者が同一のものとして捉えられていることを表す。

図 5 は ari と fite 「急いで」(副詞類 B) の意味の統合関係を示している。fite の TR であるスキーマ的な事象を、ari のプロファイルする事象が精緻化するという関係になっている。この統合関係は英語の move fast の

それと同様である。

認知文法では、句の主要部・補語 (complement)・修飾語 (modifier) は、意味的に特徴づけられる (Langacker 2008: 198ff.)。句全体のプロファイルを決めるのが主要部である。

これは図4および図5では、ari の意味構造が太枠で囲ま

れていることで表現されている。主要部 (プロファイル決定子) が際立ちの高い部分構造を持ち、非主要部がそれを精緻化するとき、その非主要部は補語であり、逆に、主要部が非主要部の際立ちの高い部分構造を精緻化するとき、その非主要部は修飾語である。上の例で言うと、主要部 ari が持つ際立ちの高い部分構造 (すなわちプロファイルであるスキーマ的な関係) を、非主要部である *lasterka* が精緻化しているので、*lasterka* はこの句の補語である。また、句 *fite ari* の場合は、主要部 ari が、非主要部 *fite* が持つ際立ちの高い部分構造 (プロファイルされている関係の TR である事象) を精緻化しているので、*fite* はこの句の修飾語である。したがって、一般に、副詞類 A は ari の補語であり、副詞類 B は ari の修飾語と言える。

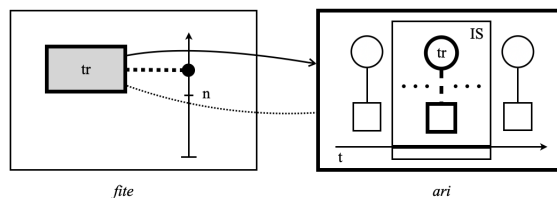


図 5

5. まとめ

副詞類 A は、英語の進行形構文における現在分詞のように、非時間的に捉えられた複合的關係をプロファイルし、ari の補語となる。ari が表すスキーマ的な事象を精緻化し、節が表す事象の具体的意味を担っているという点で述語的要素であると言える。したがって、副詞類 A を含む節は節統合論の対象とすべきであり、たとえば、*lasterka ari* のような表現が複雑述語である可能性を検討すべきである。バスク語の複雑述語はもっぱら《裸名詞+egin》構文が目され、Sarasola (1977) を始め多くの研究がなされてきた (Levin 1983a, 1983b, Levin 1989, Laka 1993, Levin & Rappaport-Hovav 1995: 140f., Oyaharçabal 2006, Aldai 2009, Martínez 2015, Acedo-Matellán & Pineda 2019 など) が、《副詞類 A+ari》構文はほとんど研究されてこなかった。オーストラリアや東アフリカの言語に見られる coverb (Amberber et al. 2007) の観点からもこの構文は注目に値する。

略号一覧 ADVLZ: 副詞化辞, BLOC: 裸位置格, GER: 動名詞, PERSON: 人名 (他は Leipzig Glossing Rules に従う) 参考文献 Acedo-Matellán, V. & Pineda, A. (2019) Light verb constructions in Basque and Romance. In: Berro, A. et al. (eds.) *Basque and Romance: Aligning grammars*, 176–220. Leiden: Brill. / Aldai, G. (2009) Is Basque morphologically ergative? Western Basque vs. Eastern Basque. *Studies in Language* 33(4): 783–831. / Amberber, M. et al. (2007) Complex Predication and the Coverb Construction. In Siegel, J. et al. (eds.) *Language description, history and development: Linguistic indulgence in memory of Terry Crowley*, 209–219. Amsterdam: John Benjamins. / de Rijk, R. P. G. (2008) *Standard Basque: A progressive grammar*. Cambridge, MA: The MIT Press. / Etxepare, R. (2003) Valency and argument structure in the Basque verb. In: Hualde, J. I. & Ortiz de Urbina, J. (eds.) *A grammar of Basque*, 363–426. Berlin: Mouton de Gruyter. / Hualde, J. I. (2003a) Adverbs. In: Hualde, J. I. & Ortiz de Urbina, J. (eds.) *A grammar of Basque*, 190–195. Berlin: Mouton de Gruyter. / Hualde, J. I. (2003b) Derivation. In: Hualde, J. I. & Ortiz de Urbina, J. (eds.) *A grammar of Basque*, 328–351. Berlin: Mouton de Gruyter. / Lafitte, P. (1995) *Grammaire basque (navarro-labourdin littéraire): édition revue et corrigée*. Donostia: Elkar. / Laka, I. (1993) Unergatives that assign ergative, unaccusatives that assign accusative. In Bobaljik, J. D. & Phillips, C. (eds.) *Papers on case and agreement I*, 149–172. / Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A basic introduction*. Oxford: OUP. / Langacker, R. W. (2009) *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter. / Levin, B. (1983a) On the Nature of Ergativity. Cambridge, MA: MIT. (Doctoral dissertation) / Levin, B. (1983b) Unaccusative Verbs in Basque. *Proceedings of ALNE 13/North Eastern Linguistic Society* 13: 129–144. / Levin, B. (1989) The Basque verbal inventory and configurability. In: László M. & Pieter M. (eds.), *Configurability: The typology of asymmetries*, 39–62. Dordrecht: Foris. / Levin, B. & Rappaport Hovav, M. (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. Cambridge, MA: The MIT Press. / Martínez, A. (2015) [Izen + Egin]a aditz-lokuzioak: inkorporazio mailak. Donostia: Universidad de Deusto. (Doctoral dissertation.) / Ortiz de Urbina, J. (2003) Periphrastic constructions. In: Hualde, J. I. & Ortiz de Urbina, J. (eds.) *A grammar of Basque*, 284–300. Berlin: Mouton de Gruyter. / Oyaharçabal, B. (2006) Basque light verb constructions. *ASJU* 40: 787–806. / Sarasola, I. (1977) Sobre la bipartición inicial en el análisis en constituyentes. *ASJU* 11: 49–90. / 石塚政行 (2021) 「移動類型論における主動詞の概念 バスク語の動詞と行為副詞の観点から」日本言語学会第 162 回大会口頭発表 謝辞 本発表のデータを得るために Arantxa Oxandabaratz 氏にご協力いただきました。本研究は JSPS 科研費 20K13023 の助成を受けたものです。